

2015年中学入試で人気の出そうな私立中学校

自分に合った学校を選ぶ時代へ

2015年入試に向けて、模試では男子の応募者が少し増え、女子はやや減少する傾向にあります。男子・女子とも「難関校ばかり受ける」「受ければどこでもよいから入学する」という受験の仕方は減ってきています。学校の中身をしっかり見る、自分に合った学校を選ぶ傾向がはっきりしてきたためでしょう。同時に、以前はよく見られた「ダメでもともとだけど挑戦してみる」というタイプの受験が敬遠されるようになりました。難関校に関しては倍率が下がることもありますが、入りやすくなるわけではないことに注意してください。

男子（男子校と共学校）に関しては、中堅前後の学校を中心に、入試で確実に得点できれば順当な結果がでるものと思われまます。女子（女子校と共学校）に関しては、キリスト教系の学校が日曜日と重なるため試験日を移動させる「サンデーショック」の年に当たります。しかしかつて言うほどの受験生の受験傾向の変動はないとみています。中堅以下の女子校は入りやすい入試となりそうです。

東京 注目は共学化の3校、応募者大幅激増

東京都の中学入試の出願が1月20日から始まっています。1月27日現在の応募状況を見てみます。慶應義塾中等部や創価などは未公表です。応募総数は昨年最終に対して約86%の水準です。23区では、2月1日午前、2日午前が昨年最終の9割を超えましたが、3日午前は8割に達していません。午前入試は女子学院、東洋英和女学院、立教女学院が1日から、青山学院が3日から2日に移動していますから、単純比較はできませんが、第二志望、第三志望といった、併願の出願が伸びていないようです。午後入試は2月1日午後がほぼ昨年並みですが、2日午後は8割台後半の水準で、午前入試よりも出願が進んでいます。多摩地区では2月2日午後と3日午前が昨年最終に近い水準、1日午前は昨年の9割を超えましたが、2日午前と1日午後は8割台後半です。2日午後がほぼ昨年並みなのは、桐朋女子が昨年3日だった入試を2日午後に移動したことが大きな要因です。3日午前は都立一貫校の出願がもう締め切られている影響でしょう。

各回合計の応募者数が200名以上の学校では、戸板が共学化・校名を変更する三田国際学園が大爆発、昨年最終の10倍近い応募者数です。応募者の約45%は男子ですから、男子にも十分浸透しているほか、女子も大幅に応募者が増えています。日本橋女学館が共学化・校名変更する開智日本橋学園も昨年最終の6倍近い応募者数で、こちらは男女比がほぼ

半々となっております、同じく男子にも十分浸透しているだけでなく、女子も大幅に増えていきます。男子校から共学化する東洋大学京北も昨年の3倍を超える応募者数ですが、こちらは男女別の内訳が未公表です。模試での希望状況などを見ると、男子の期待プラス女子への浸透が進んだ結果だと考えられます。

他校では桜蔭、女子学院、雙葉、東洋英和女学院、立教女学院、学習院女子、東京女学館、玉川聖学院、文化学園大学杉並、早稲田、桐朋、佼成学園、帝京大学、淑徳巣鴨、聖徳学園、帝京八王子、東海大学菅生、順天、東海大学付属高輪台、目白研心、国立の東京学芸大学附属竹早の応募者が増えています。桜蔭、女子学院、雙葉、東洋英和女学院、立教女学院、学習院女子はサンデーショックの影響、東京女学館はサンデーショックよりも午後入試を増やした効果でしょう。玉川聖学院もサンデーショックよりも入り易い入試を増やした結果だと思われます。文化学園大学杉並はサンデーショックよりも難進グローバルコース（高校から、カナダの高校卒業資格もとれるダブルディプロマコースに進学するコース）の人気です。

早稲田、桐朋、帝京大学は進学校としての人気、佼成学園と聖徳学園は進学実績向上への期待でしょう。順天はスーパーグローバルハイスクールに指定され、目白研心はスーパーイングリッシュコースを中3から設置していて、こうしたグローバル教育への受験生の期待が現われています。東海大学付属高輪台は入試回数が増えたことで応募者が増えました。淑徳巣鴨、帝京八王子、東海大学菅生は併願先としての評価が高くなっているようです。

この他、麻布、開成、駒場東邦、聖学院、京華女子、恵泉女学園、香蘭女学校、女子美大付属、三輪田学園、桐朋女子、早稲田実業、成城学園、都立立川国際、都立武蔵高等学校附属、国立の東京学芸大学附属世田谷も応募者がやや増えています。足立学園、海城、攻玉社、東京都市大学付属、本郷、鷗友学園女子、吉祥女子、女子聖学院、田園調布学園、普連土学園、和洋九段女子、共栄学園、工学院大学附属、國學院大學久我山、玉川学園、多摩大学附属聖ヶ丘、帝京大学系属帝京、広尾学園は、1月27日時点ではまだ昨年を上回っていませんが、かなり近い水準にあります。今後の出願の増加で、昨年を上回るかもしれません。

神奈川 横浜英和は青山学院効果で応募者激増

神奈川県の中入学入試は東京都と同様、一般の入試は2月1日からですが、1月20日出願開始の東京都とは異なり、冬休みがあけるとすぐに出願開始です。1月21日現在の応募状況から見てみます。男子校と男女校の応募総数は、昨年最終に対して8割弱ですが、女子校はすでに9割以上の応募者数になっています。女子校の人気が高くなっていますが、1つはサンデーショックの影響で、フェリス女学院、横浜雙葉、横浜共立学園がいずれも昨年の応募者数を上回っています。また、横浜英和女学院は1月21日現在で各回合計の応募者数

が昨年最終の2.4倍の応募者数です。同校は午前入試は前日、午後入試は当日午前中まで出願を受け付けますので、まだまだ増えそうです。同校もプロテスタント校で、2月1日は午後しか入試を行ないませんが、サンデーショックよりも青山学院の系属校化が決定したことでの人気です。この他、公文国際学園、自修館、日本女子大学附属や、入試を増設した東海大学付属相模が昨年の合計最終応募者数を超えています。

昨年には達していないものの、応募者数が近い水準に達していて、まだ出願を締め切っていないことから、今後も応募者が増えそうなのはカリタス女子、聖園女学院、桐光学園、神奈川大学附属です。また、清泉女学院、洗足学園、日本大学藤沢は、2回や3回の応募者数はまだ少ないのですが、1回は昨年を上回っています。1回の不合格者は追加出願で2回に回る受験生も多いでしょうから、最終的には昨年の応募者数を上回るかもしれません。なお、中央大学附属横浜も1回が増えていますが、同校は昨年まで3回だった入試を2回に減らしています。男子校が話題に上りませんが、浅野と栄光学園は出願が締め切られ、昨年よりやや減っています。

ところで、少し先の話になりますが、2017年春には、公立中高一貫校として横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属が開校します。同じエリアにある私立中学校では前倒しで入試日程を変更する可能性もあります。神奈川県内の中学を希望する、今の小学4年生、5年生は、来年以降の動向に注視してほしいと思います。

千葉 全体的にはややマイナスの応募状況

千葉県の私立中では12月1日からの推薦・専願・第一志望入試（中堅校を中心に実施）が終了し、間もなく1月20日から一般入試がスタートします。各校の1月18日現在の応募状況をまとめます。

終了している12月からの推薦・専願・第一志望入試では、応募者数の情報が入ってきている学校のみでの比較では、応募者数が約14%減っています。どこかの学校が大きく減らした、というよりも全体的に少しずつ減らしています。昨年を上回ったのは昭和学院だけで、受験生が併願できない入試を避けている可能性があります。1月20日からの一般入試では麗澤が昨年最終応募者数の2.2倍と、爆発的に増えています。同校は今春からコース制を実施、AEコースとEEコースの2コース制となっていて、両コースを希望するとダブルカウントされるためではありますが、ダブルカウント分を差し引いても昨年の1.5倍以上です。入試日程が増えたことは要因の1つですが、増加の内訳を見ると男子の増加が目立っています。

各回合計の応募者数で、すでに昨年の最終応募者数を上回っているのは麗澤、昭和学院と

公立の市立稲毛高等学校附属、昨年対比のマイナスが小さく、昨年最終の応募者数に近づいているのは聖徳大学附属女子と専修大学松戸です。また、2月入試など、出願開始前の入試を除いて昨年最終を上回っているのは市川、昭和学院秀英、成田高等学校附属、差が小さいのは渋谷教育学園幕張、東邦大学附属東邦です。難関・上位校の人気はしっかりしており、応募者数の全県合計は、最終的には昨年に近い水準になりそうです。

埼玉 栄東は今年も1万名を突破

1月10日から埼玉県私立中入試が始まりました。各校のここまでの応募状況をまとめます。

学校別では、昨年応募者総数が10,000名を超えた栄東が、昨年とほぼ同じペースで10,000名突破目前となっています。現段階で昨年の最終応募者数をすでに上回っているのは、国際学院、昌平、獨協埼玉、埼玉栄、大宮開成、城北埼玉、浦和ルーテル学院です。国際学院は昨年減らした入試回数を今年は増やしたこと、昌平はTコースを新設したこと、獨協埼玉は入試日程を前倒しし、1月11日スタートとしたことなどが主な要因でしょう。

昨年の総応募者数に近い水準に達しているのは、浦和実業学園、開智、春日部共栄、狭山ヶ丘高等学校附属、自由の森学園です。このうち、狭山ヶ丘高等学校附属は開校後まだ年数が浅いのですが、人気は安定しています。

埼玉県ではまだ入試が進行中で、応募者数が未公表の学校もありますので、最終的にどのくらいの応募者数になるかは、これからの話ですが、元気のいい学校がある一方で、全県では応募総数が減るかもしれません。昨年の最終応募者数にはまだまだ差が大きい学校も見られます。途中経過ではありますが、こうした学校の受験生が増えることを期待したいところです。